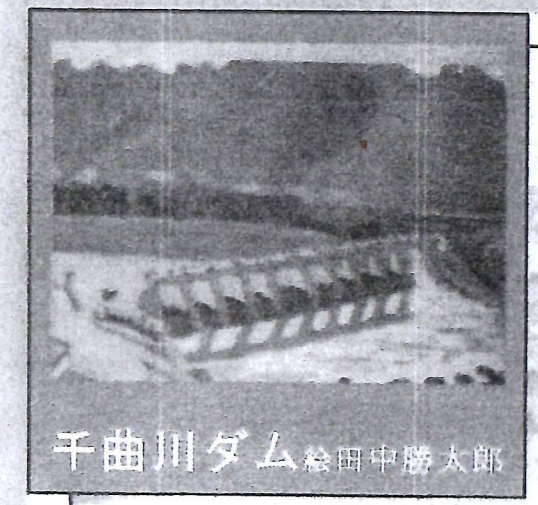


千曲川ダム 絵田中勝太郎

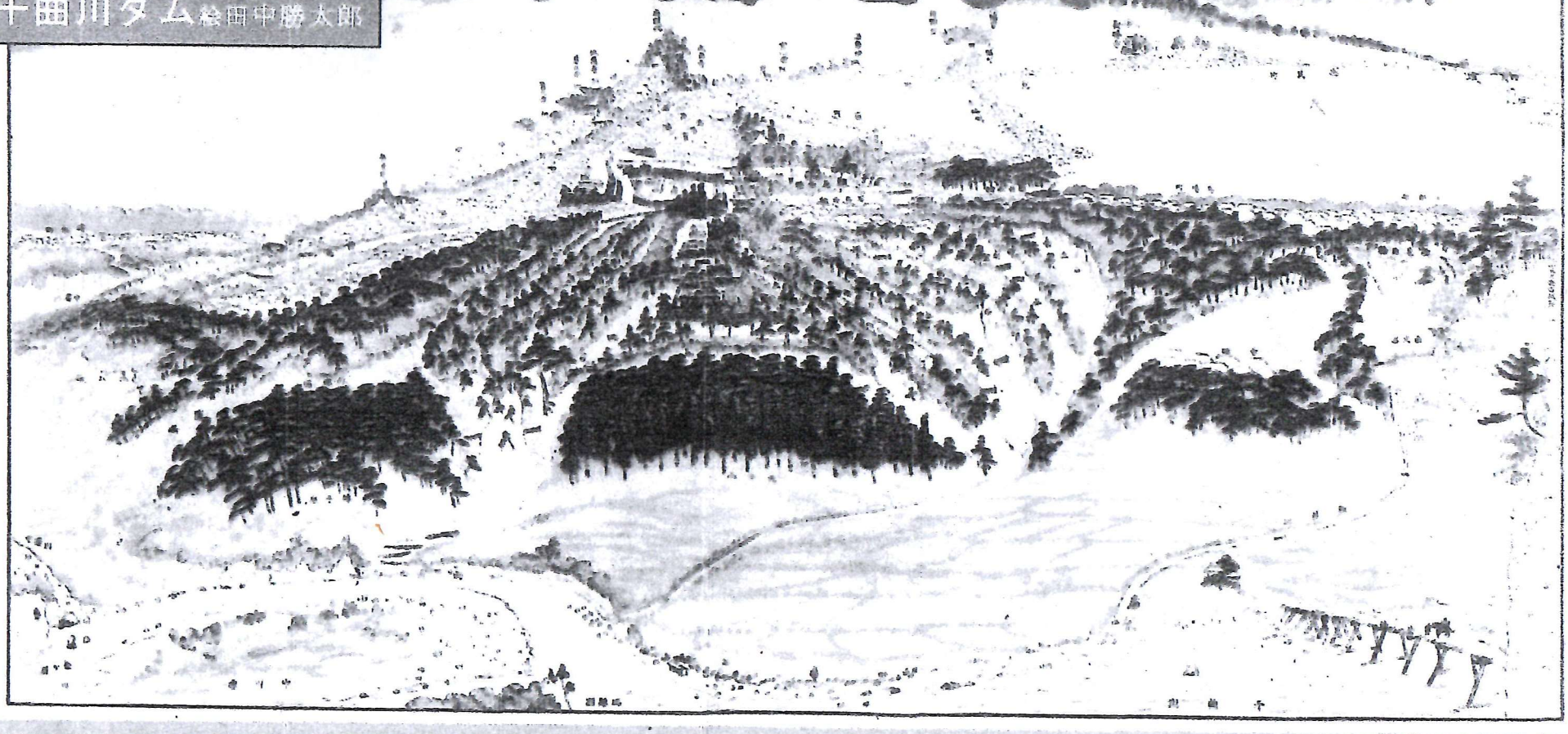
絵と歌で綴る 小諸の江戸・明治・大正

小諸唱歌

小諸城址繪圖

備考

小諸城址繪圖ハ明治三十年頃ノ作ニシテ、当時ノ城址ノ面影ヲ偲ブニ好適ナリ。城ノ北麓ニ位スル小諸ノ市街ハ、遠ク浅間ノ麓ニ連ナリ、東ハ千曲川ノ流ニ臨ミ、南ハ千曲川ノ流ニ臨ミ、西ハ千曲川ノ流ニ臨ミ、北ハ千曲川ノ流ニ臨ミ、中央ニ城址ノ聳ユルアリ。



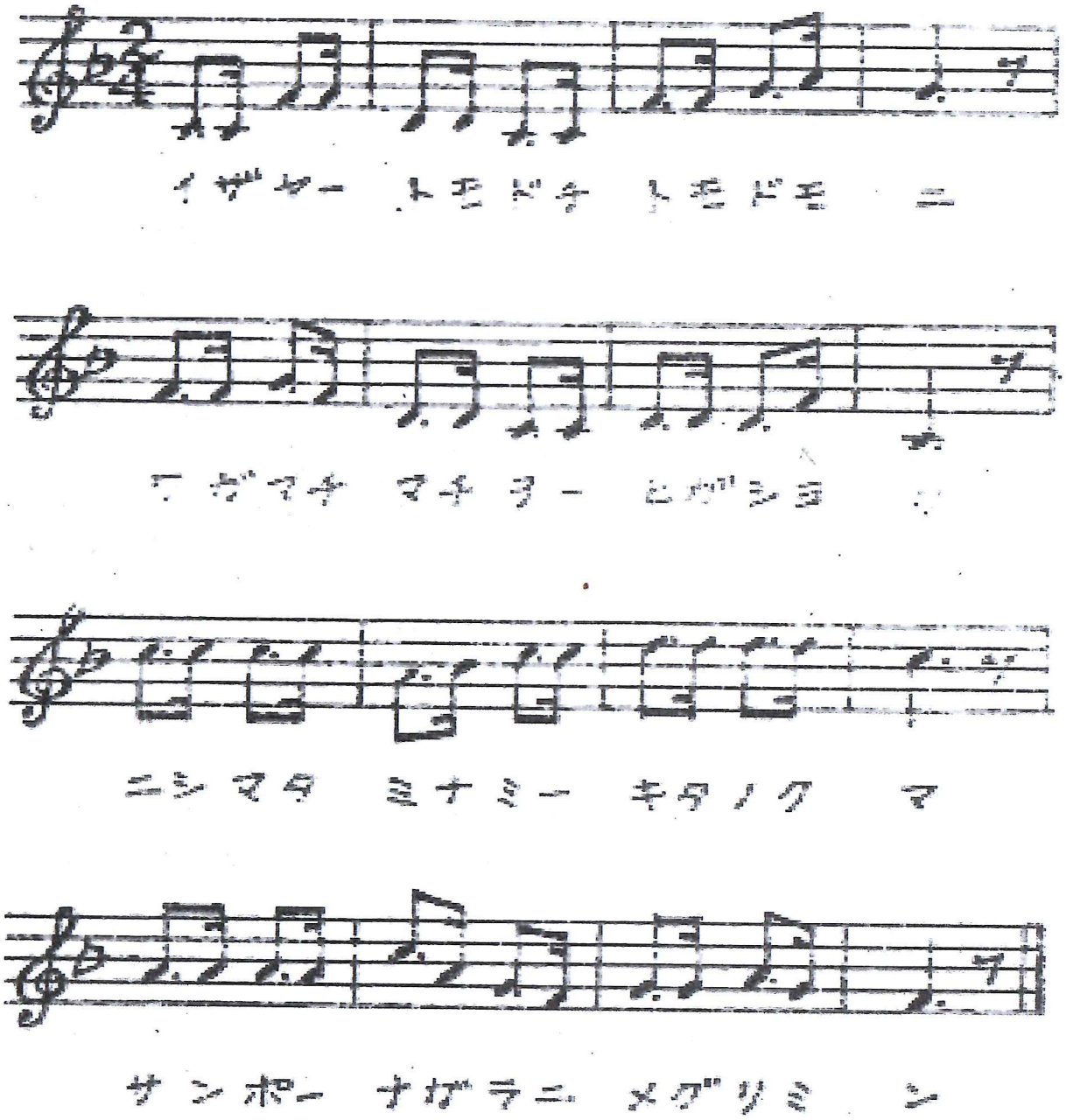
絵と歌で綴る
小諸の明治・大正

小諸唱歌

作　歌
池田芦舟
星野香山合作

作　曲
長尾亥三太

明治３８年に作歌・作曲・大正１５年改正・追加作



小諸唱歌楽譜目次（明治３８年・大正一五年作詞の比較）

一　**1　いざ友どち共々に　我町々を東より　西また　南北のくま　散歩ながらに巡り見ん**

浅間山・千曲川・小諸町

二　**2　煙は高し浅　間山　流れは清し千曲川　この江山の間にある　町は即ち小諸町**

三　人口１万３千余　戸数は二千と三・四百　東西凡そ一里半　南北四十と五丁あり

3人口八千又五百　戸数は一千五百余戸　東西凡そ一里半　南北四十と五町あり

乙女橋・山の前・諸山

四　春は弥生の乙女橋　橋を渡れば山の前　北に峙　諸山は月の名所にあるぞかし

4　春は弥生の乙女町　真向に見ゆるは山の前　諸山糠塚一里づか　其古事を操矢川

水棚・粟島社

五　山の下なる水棚の　池の隔てし粟島は　安産の守護の神なりと　婦人の参詣稀ならず

糠塚・操矢川・亀澤

六　勧人長者や糠塚の　其古事を操矢川　巌にもかたき亀澤に　出づる亀石珍しき

唐松

七　八町有余の松並木　夏は涼しき風越り　疲れし旅人を慰めし　其唐松は名のみにて

5　今は松なき唐松も　ほのぼの明るく曙の　空飛ぶ鳥の三四五羽　又一人の眺めなり

八　今は立ち寄る蔭もなく　人家や畑と変りたり　此処に四十八　ありしも嘗て發堀かれぬ

加増稲荷

九　赤き鳥居は其のむかし　加増の為に藩公の勧請せられし社として　加増稲荷と人は呼ぶ

一〇　残れる松の下蔭に　見ゆる社はかしこくも　過ぐる明治十一年時の帝の御車を

6　十一年の御巡幸　かたじけなくも御車を　とゞめ給ひし御あとの　記念の宮は中ほどぞ

御幸町　一一　駐め給ひし御跡の為の御幸町　ここを通つて荒堀りの左に岐れ二里行けば

塩名田・枇杷橋　一二　鰍の名所塩名田ぞ　往き来に自動車・俥あり　枇杷橋過ぎて枇杷峠　座頭ころがしここなるよ

小原　一三　西の方なる小原区は　人家の数も百余軒　塩川城のありし跡　白く見ゆるは製糸場

7　忽ち来る荒堀の　南は小原区朝烟り　たてる人家は百ばかり　分教場も置かれたり

湯の瀬温泉・明神池　一四　湯の瀬の温泉訪づれて　谷の落ち来る滝眺め　明神池で釣りせんは　やがててのひまに譲るなり

六道原・味噌塚　一五　六道原の六地蔵　これには口碑のあるとかや　鉄道線路の北にある　其名も高き　味噌塚は

一六　土に点火ありし時　その火は雨の降るまでは　消えぬと云ふを学者達　研究資料としたりたり

一七　坂を登りし一と町は　小諸の町にあらねども　古来工業発展し　履物類の産地ぞや

蛇堀橋・蛇堀川　一八　静かに渡る蛇掘橋　川は名に負ふ蛇堀川　大蛇のほりしと伝ふるは　昔のひとの言葉ぞ

8　向う彼方は蛇堀橋　川は名に負ふ蛇堀川　大蛇のほりと伝ふるは　昔の人の言の葉ぞ

与良町　一九　さて入り来る与良の町　行きかう人のいと繁く　軒を並べし商店は競うて業にいそしみぬ

9　橋を渡れば与良の町　行きかふ人もいと繁く　軒を並べし商店に　土地の繁栄ぞ知らしける

下河原・駒形神社・寄木稲荷　二〇　左に降りて拾.〇町与良の旧地の下河原　古城の跡や駒形社　寄木稲荷も其隣り

長勝寺・熊野小路・薬師小路・鶴巻町　二一　町の東の）長勝寺　其横側に熊野道　薬師小路を通りぬけ　西へ向へば鶴巻町

１０　左に行けば神明社　　右に大日小路あり　町の半に長勝寺　その横側は熊野路

二二　活動館や料理店　夜の繁華の新開地　朝はとくよう賑わえし　製糸場への女工たち

荒町　二三　進む荒町本通り　赤坂の其間　古くは垂井と称えしが　今は商業盛んの地

１１　つゞく荒町本通り　左に下れば赤坂の　一二三番数町の　数えておかん後のため

赤坂町　二四　横に下れば赤坂ぞ　上み下一二三番町　会社・工場・小売店　演劇場も建られて

南町・東町　二五　きのふに変わる　今日の様　げに驚くは世の進歩　此の地の南は南町　東にある東町

二六　皆近頃に殖えしまち　停車場へは間近にて　何れの家も新しく　木の香の匂うこころよさ

二七　山浦道のこなたには　煙硝蔵の跡古く　目出度き万歳街道や　大黒穴もこのほとり

八幡小路・八幡神社　二八　元来た道を引返へしし　八幡小路を登りつめ　仰げば森はおごそかに　由緒尊き弓矢神

１２　元来し町へ出でくれば　右手は八幡小路なり　八幡神社の祭典は　毎年九月一日ぞ

二九　城の鎮めと秀久が　あがめ祀りし社あり　毎年九月祭典の　相撲は世間に知られたり

高等女学校　三〇　東隣の建物は　県立高等女学校　生徒の数も年に増し　五年制度の卒先ぞ

浅間山　三一　ここより東へ三里にて　世に著名なる浅間山　活火の山嶺の風景は　神ユ鬼作の妙趣あり

熊野神社　三二　熊野の宮は伊邪那美の神を祭れる町社なり　夏は木陰に集い来て　暑さを避くる人多し

１３　熊野の森は伊邪那美の　神を祭れる町社なり　夏は涼しき木下陰　暑さを避くる人多し

全宗寺　三三　再び出づる町の中　全宗寺をば通り過ぎ　左に入れば旭町　小学校へ　の通学路

１５　再び出づる町通り　かなたにあるは全宗寺　六十三の銀行は　下りて左の方にあり

紺屋町　三四　其又右は紺屋町　製材工場音絶えず　蚕種会社や製糸場　並びに電気の変電所

１６　右は山道細小路　深く入りなば紺屋町　往き来の人の足しげき　北山里の通りぞや

第二小学校・水道町・貯水池　三五　彼方の大なる建物は　第二の小諸小学校　つづいて長き水道町　上にあるのは貯水池ぞ

太郎山　三六　北に見ゆるは太郎山　遠き昔は城砦まで　甲越時代は狼煙台　今は松をば植え付けぬ

１４　北に見ゆるは太郎山　麓の家は五六十　松井　軽石　東沢　皆山里の眺めよし

三七　この頂に登りなば　心も広く気は伸びて　日本アルプス・八ヶ岳　佐久の平も一と眺め

松井・軽石・東沢　三八　麓の農家五六十　松井・軽石・東沢　東南にちらばりて　皆山里の景色よし

海応院　三九　商家の並ぶ其奥に　曹洞宗の海応院　甍も高く輝きて　昔ながらの巨刹なり

１７　商家の並ぶその奥に　海応院や宗心寺　堂宇は高く庭広く　樹木は多く池清し

宗心寺　四〇　西に接する宗心寺　是れ又古き禅寺なり　表の町は繁華にて　店頭百貨を陳ねたり

六三銀行・相生町　四一　六三銀行左はし　僅か下れば相生町　停車場への通りまで　往き来の人足繁し

１８　小諸郵便電信の　局この前をばはや過ぎて　行けば左に停車場　相生町の通るなり

光岳寺　四二　荒町過ぎて右の方　浄土宗なる光岳寺　同宗佐久の触れ頭　古杉高く空をつき

１９　荒町出でゝ右見れば　浄土宗なる光岳寺　二つの門を前にして　棟高々と聳えけり

四三　峨々と聳ゆる山門に　十六羅漢の存置あり　門の左の鐘楼は　二里の余に響く巨鐘なり

成田山　四四　山内成田の不動尊　霊顕いともあらたかに　毎月二十七日の夜の人出は夥し

２０　寺のひだりは成田山　梅や桜は滝つぼに　散り込む春の花吹雪　又なつかしの風情かな

２１　博愛館はすぐ前ぞ　いざや登りて眺めなん　遠き山々近き川　村里までも一目なり

本町　四五　ここを立出で本町へ　向へば町は真直に　並ぶ商家の繁昌は　入り来る人の目につけり

２２　こゝを立出で本町に　向えば町は真直に　軒を並べし商業家　入り来る人の賑はしや

六供町　四六　右に登り行く　六供の町の賑はしさ　軒の球燈茶屋の旗　人の通り絶えもなし

２３　少し進みて小路あり　六供の町のいと長く　上りつめれば成就寺　一本桜の名はたかし

２４　手前にあるは第二号　純水館の製糸場　機械の音をよそにして　元来し道に帰り来ぬ

成就寺　四七　上がり詰めれば成就寺　相生松の名も高く　一と本桜は古びたり　されど梢に花咲けり

無縁堂・大井道見墓　四八　北の方ふる無縁堂　畑の真中に孤立せる　古き一基の其墓は　道見大井の遺跡とぞ

菱野薬師道・丸純製糸場　四九　北に上る道筋は　菱野薬師の本通り　前は丸純製糸場　絶へず運轉盛なる

向う六供　五〇　機械の音を余所にして　向う六供の清水呑み　かわける喉を潤して　元の道へと帰り来ぬ

小諸銀行・馬場裏町・町役場　五一　小諸銀行右に見て　下る左の入口は　馬場裏町への通路にて　前に見ゆるは町役場

２５　小諸銀行右にみて　下れば町のなかばなる　左に立てし里程標　何処の距離も明かぞ

５７　馬場裏町を登りたる　南にあるは町役場　機業会社も音高く　国家の富を織り出しぬ

里程標　五二　町の中央の里程標　何処の距離も明かぞ　飾る店頭眺めつつ　忽ち来る四つ辻の

警察署　五三　向うにあるは警察署　門標高く厳めしく　特別ここの署内には　観測所の電話あり

２６　足を早めて四辻に　進む向は警察署　鯱高く厳めしく　電話線も架けられぬ

中町・瓦門・大手町　五四　右は中町　左には　昔の儘の瓦門　大手の口に休らひて　いざや道おばかえてみん

２７　右は中町左には　昔のまゝの瓦門　大手の口に休らひて　いざや道おばかへてみん

田町・喜多町・常盤町　五五　北お歩めば菜の花の　咲いてゆかしき田町裏　近頃開きし道二つ　其名は喜多町・常盤町

２８　北に下がれば菜の花の　咲きて床しき田町裏　菱野薬師や大里の　金比羅山には程近し

小諸商業学校　五六　家も殖えたり此処彼処　人も増したり昨日今日　向こうの鉄筋建築は　県立小諸商業学校

五七　収容生徒五百名　徴兵猶予の認可あり　運動場や寄宿舎の設備も総て整へり

滝原道・山根製糸場　五八　滝原道の左には　煙突高く天を突き　運搬車のはげしさは　これぞ山根の製糸場

菱野鉱泉場　五九　北に登らば一里にて　菱野薬師の鉱泉場　避暑の適地と世に知られ　四時の浴客いと多し

丸山・宮の窪・金毘羅・飯綱山　六〇　石器の出でし丸山も　一本松の宮の窪も　皆此道の附近にて　金毘羅・飯綱程近し

布引鉄道　六一　小高き岡より見渡せば　臥龍の如く西南に　長く伸びし布引の　工事中なる鉄道ぞ

實大寺・尊立寺・健速神社　六二　鶯唄ふ法華経の寺は實大寺・尊立寺　健速神社は森高く　登る石段幾階ぞ

29　うぐいすうたふ法華経　寺は実大、尊立寺　健速神社は森高く　彼方に見ゆるは托応寺

祇園祭典・応興寺　六三　毎年七月十三日　世に知れ渡る神輿練り　小諸祇園の社なり　森の彼方は応興寺

養蓮寺　六四　戻りて出づる中町の　向こうの角には養蓮寺　一向宗の古き寺　宝物類もありとかや

30　戻りて出づる中町の　向こふの角には養蓮寺　前は裏町長通り　製油会社もありときく

六五　土佐の光起画きたる　親鸞上人一代記　国寶今に存すれば　請うて一覧するもよし

御園町・裏町　六六　寺の東の新道は　昔忘れぬ御園町　前は裏町長通り　澤を越ゆれば新町よ

横町・鍋蓋城（高屋敷）　**六七　31　横町通る弓手には　石垣高く松の枝の　風にむせぶは古の鍋蓋城の跡ぞかし**

市町　**六八　32　右に曲りて市町の半に来れば橋の下　おどろおどろと鳴り響き　汽車は煙を吐きて行く**

閻魔堂・稲荷社　六九　下る真向は閻魔堂　今は何処に移しけん　桃に桜に咲き匂ふ　稲荷の園となりにけり

33　目先にあるは閻魔堂　今はい何処にうつしけん　桃に桜に咲き匂ふ　稲荷の園となりにけり

天王神・天王町　七〇　南に開きし新道は天王神の前なれば　天王町と名をつけて足柄町への通りなり

柳町　七一　又古の北の崖下は　藁屋瓦屋静かにて　清水えをくつる青柳　糸を因める柳町

中澤橋　七二　行くや中澤橋凄く　谷底深く薄暗し　古来の橋　我が町の　三大橋の一となす

34　清き流れにさす影の　柳町をば左に見　行けば中沢橋凄く　谷底深くうす暗し

新町・片側町　七三　進む新町東口　ここは人家も右のみが　片側町とよびなしぬ　下がれば町は平なり

35　入るや新町東口　ここは人家も右のみか　片側町と人は呼ぶ　下れば町も平らなり

七四　商工励みて西端の　繁華を今に支へたり　いざ憩はなんあの社　昼も食なんあの木陰

３６　左右に並ぶ商店は　西の端なる繁華ぞや　いざ憩はなんあの社　ひるも食べなんあの木陰

青木神社　**七五　３７　青木の宮に額きて　かたへの石に友どちと　暫し疲れを休らひて　又共々に立ち出でぬ**

栃木川・手城塚・手城塚稲荷　**七六　３８　水も逆巻く栃木川　橋を渡りて五六町　左に行けば手城塚　稲荷の神の社あり**

七七　３９　昔武将の城の跡　四方の眺めも廣やかに　春の朝は　花によく　秋の夕べは月によし

富士見坂・花川・布引　**七八　４０　あれに見ゆるは富士見坂　蛍の名所の花川も　紅葉に名高き布引の　袂の中のものにこそ**

押し出し　**七九　４１　秋の夜ならば聞きてみん　この塚山の西にある　古来名を得し押し出の　池の水際の虫の音を**

大梁　**八〇　４２　いざや帰り　は友どちよ　別なる道を取るとせん　大梁下りて九十九折　坂を登れば高き場所**

大久保　八一　ここに佇ずみ見返へれば　川辺は低し大久保の　遥かに白き橋の上　寸馬豆人追々に

八二　川原の松にかくれ行く　又一人の風趣あり　右は大平ら山続き　古城の奥の裏手なり

足柄町　八三　足を早めて足柄町　樋の下には出ずにして　農業倉庫の前を過ぎ　行く先々は士族地よ

４３　右は大平松ばやし　樋の下へは出ずして　杉の木立の切り通し　行く先々は士族地よ

太鼓櫓・参の門・頌徳碑　**八四　４４　太鼓櫓も雲雁の　馬場の跡なし汽車の道　沿ふて来れば参の門　左にあるは頌徳碑**

一と本柳　**八五　４５　柳の下に苔むせる　石は古へ秀忠が　憩いし跡の記念とて　今に伝へて残りたり**

小諸の城・乙女坂　八六　小諸の城は天文の昔大井がいらみたる　要害堅固の乙女坂　二の丸臺は築かれぬ

御所平・酔月城　八七　古き館は御所平　後皆武田の手に入りて　其名も雅致の酔月は　山本・馬場の縄張りぞ

七曲輪　八八　時めく勇士の七曲輪　鍋蓋・鹿嶋・陵神や　耳取・柏木・森山に　尚宮嶋も加はれり

牧野候之居城　八九　其後ここは牧野候　世々の居城となせし跡　明治初年の廃藩に　樹木を植えて宮を建て

懐古園・天神・荒神　九〇　その古を忘れじと　懐古園とは称えらる　社は天神・荒神に藩主を合わせ祀りたり

４６　懐古園は牧野候　世々の居城の跡にして　社は天神荒神の　二神を合せ祀りたり

九一　４７　雲か霞か将た雪か　園に満ちたる桜花　旧士はこれを断腸の　花と昔を偲ぶらん

九二　園内何処も樹は多く　四季の眺めを備うれば　訪ね来る人の絶え間なく　旗亭旅館んの設けあり

４８園内何処も樹は多く四季の眺めを備ふれば訪い来る人の絶間なしこゝをば出でて右に行く

不開門・富士見台　九三　去る大正の十二年　摂政殿下御台臨　不開門や富士見亭　谷を隔てし千曲川

天守台　九四　四方の景色を御眺望　この有難き記念よと　建てし石碑は天守台　万代までも伝ふらん

耳取町・中棚　九五　茲をば出てて右に行き　耳取町を通り越し　くだれば仲棚鉱泉場　浴客昼夜群がり

４９　耳取町の入口に　小諸義塾は建てられぬ　隣にならぶ学習舎　共に学びの園なるぞ

戻り橋・袴腰・五里淵　九六　向にかかる釣橋は　城に縁故の戻り橋　見上げる山は袴腰　下は五里淵水蒼く

５０　南に下がりて新道を　行けば中棚鉱泉場　見上げる山は袴腰　下は五里淵水蒼し

千曲電気会社　九七　釣する人の影も見え　夏の遊びは殊によし　川辺に集ふ人々は　千曲電機の工夫ぞや

九八　やがて工事の成る時は　電気の力何百里　飛んで我国工藝の　事業をさぞや助くらん

時雨坂・七軒町・避病院　九九　木立は傘の時雨坂　上れば高し七軒町　県下模範の名を得たる　伝染病院所在地よ

５１　こゝをば後へひききかへし　木立は傘か時雨坂　上がれば高し七軒町　しめ掛山は右にあり

馬場町・注連掛城　一〇〇　馬場町通り右手なる　注連掛城の其あとは　藩侯代々の墓所　訪ふものは松の風

５２　藩侯代々の墓所　訪なふものは松の風　前に見ゆるは下河原　駒方坂は道けわし

鉄道隧道　一〇一　踵を後に廻らして　東に向かって二三町　汽車の下なる隧道は　松井川の水の上

停車場　一〇二　左に行きて又ひだり　ここは賑ふ停車場　汽車の響き笛の聲　人の乗り降り忙しや

５３　馬場町通り出てくれば　こゝは賑ふ停車場　車の響き笛の声　人の乗り下りいと繁く

一〇三　これより十と九哩　小海駅への鉄道は南北佐久の連鎖線　私設会社の経営ぞ

富士見町・東信繭糸社・倉庫　一〇四　北の通りは富士見町　東信繭糸の会社あり　商業倉庫は其ならび　小諸倉庫はこの南

運送店　一〇五　運送店は数個所に　高く樹てたる旗印　共に競ふてつとむれば　貨物の運搬いと早し

５４　通運会社や中牛馬　高く樹てたる旗印　共に競うて戦はす　貨物の運搬いと忙し

鹿嶋神社　一〇六　鹿嶋神社は尊くも　武御雷の命をば　斎き祀れる郷社なり　城の鎮めの古き宮

５５　踏み切り行きて筒井町　倉庫会社は北にあり　五軒町をば右にして　鹿嶋神社の前に出づ

登記所・電燈会社・中信銀行・庶民銀行　一〇七　相生町に打出でて　登る左は登記所　電燈会社も並びあり　中信銀行庶民行

５６　武御雷の命をば　斉き祀れる郷社なり　右に輝く白壁は　登記役場の建物ぞ

小諸小学校　一〇八　通り過ごして振り返へり　友に遅れそ松井川　橋の東の建築は　町立小諸小学校

５８　友なおくれば松井川　橋を渡れば袋町　小山の如き建築は　町立小諸小学校

一〇九　５９　教えの庭に生ひ志げる　貳千有余の撫子は　朝よりとくに愛らしく　咲ける姿げやな

小諸児童図書館　一一〇　我等の常に親しめる　小諸、児童の図書館は　此の校の舎内に設け置かれたり

小諸郵便局　一一一　隣にあるは郵便局　人の出入りの繁くして　電信電話絶え間なく　通信事務こそ劇しけれ

袋町　一一二　ここの下なる袋町　繭糸会社や乾燥場　製糸工場　再繰所　付属倉庫も連なり

純水館　一一三　純水館は煙突の　上る烟と名も高く　製造年額数百万　海外までも知られたり

６０　ここの前なる製糸場　純水館は烟突の　上る煙と名も高く　海外までも聞こえたり

一一四　６１　これにて町を一めぐり済ませば暫し傍らの芝生に憩いこの土地の　主なる産物数えみん

主なる産物　一一五　６２　繭に生糸に織物に　氷豆腐に寒露梅　その名も薫る松茸や　世に名も高き信濃蕎麦

一一六　６３　豆類麦類酒醤油　味噌に素麺干うどん　川魚類は鮎と鯉　鮠とかじかの　数々ぞ

商業地　一一七　６４　人数と戸数は誇らねど　誇るは名高き商業地　奮ひはげみて此町の　繁華を共に謀るべし

一一八　６５　折しも春の夕日影　散りくる花を照すなり　いざ分かれんよ友どちよ　いざ帰らん吾家に